

妊娠管理における胎教

分担研究：妊婦の生活環境と出産への影響に関する研究

日本医科大学

研究協力者 越野立夫、中井章人

要約

胎教が、妊婦の生活環境と出産へ及ぼす影響を、平成4年度に引き続き検討した。今年度は全国規模で胎教を行っている施設の実態調査、ならびに胎内記憶(Imprint)に対する基礎的な調査を昨年度より継続して行った。

その結果、各施設において、妊婦が胎教を実践することは、その生活環境に変化をもたらすものの、各施設毎の目的に見合う胎児、新生児に対する影響は客観的に証明されるには至らなかった。また、胎内記憶の検討では生後1~2ヵ月で認められた反応が、生後日数を隔るにつれ、弱まる傾向が示された。

次年度は、胎教を行っている妊婦を対象に分娩様式、新生児予後を調査し、胎教が出産に及ぼす影響について検討する予定である。

見出し語：胎教、胎内記憶

研究目的

胎教が妊婦の生活環境と出産へ及ぼす影響を明らかにするため、初年度、アンケートによる妊婦の意識調査、ならびに胎内記憶(Imprint)の存在に対し基礎的な検討を行った。

その結果、97.7%の妊婦が胎児は外界からの刺激を感じると考え、ほぼ全例でなんらかの手段により胎児とコミュニケーションを持とうとしていた。また、約60%の妊婦が妊娠と同時に、積極的に胎教を意識し取り組み、種々の生活習慣(喫煙、飲酒、食事、睡眠、生活リズム)を変えていた。一方、胎教の根拠の一つとして取り上げた胎内記憶は、生後1~2ヵ月の間、母親の主観において、その存在が示唆されたものの、客観性に乏しく科学的に証明するには至らなかった。

そこで、本年度は胎教を全国的に行っている施設の実態調査を行い、その目的、効果を検討した。また、胎内記憶については同様の実験系をもとに母子間に起こる変化の長期的な影響を検討した。

1 実態調査

全国規模で胎教を行っている施設を対象に直接面接、ならびに文献より調査した。公開資料の提供ないしは直接面接に協力が得られた施設は8ヵ所で以下に各施設の目的、指導方法、施設規模の概略を示す。

①A

目的：感覚外知覚(extra sensory perception: ESP)能力の開発。右脳は宇宙全体の情報を貯蔵しており、その機能開発により人類はより優れた能力を有するようになる。

方法：絵、漢字、ドッツ(計算)カードを使い胎児にイメージを送り、コミュニケーションを計る¹⁾。

施設：全国200ヵ所。

②B

目的：教科学習を通じての人間形成。

方法：幼児用の教具(母と子の童謡カードと音楽テープ)を活用した胎教²⁾。

施設：全国80ヵ所。

③C

目的：天才児を生むためのカリキュラム

方法：ジッコ・スセディック³⁾の理論を日本風にアレンジし、数字、文字(ひらがな、カタカナ、アルファベット)、図形、生活の仕組みについて具体的にかつ正確に教え胎児のイメージを広げる。また、3才頃までに胎内での学習を復習する。

施設：事務局15ヵ所。

④D

目的：人間の個性は出生前に50%以上完成する。従って、胎児期には心に関する胎教が最も重要⁴⁾。

方法：不詳

施設：東京、大阪2ヵ所。

⑤E

目的：妊婦自身の精神環境を整え、母性(胎児を思う心)を育てる。その結果として、胎内環境を向上させる。

方法：マタニティーサロンを主催、妊婦のリラゲゼーションをはじめ、胎児への問いかけ、唄、音楽テープ、幼児玩具を使用しコミュニケーションを計る⁵⁾。

施設：都内ならびに近郊数カ所。

⑥F

目的：母体の神経系の安定を図り、胎児とのコミュニケーションを確立させ、胎児右脳における想像力を開発する。胎児の情緒面と学習能力、双方を高める⁶⁾。

方法：プリガフオーン（コミュニケーション）、箱庭製作（想像力）、音楽テープ、数字、文字、図形カードを使用。

施設：大阪市内2カ所。

⑦G

目的：胎児の頭脳開発を目的とする胎内教育。

方法：日本古来の帝王学を実践する。妊娠3ヵ月から10ヵ月まで8段階のカセットテープ、文字、絵カードを使用する。

施設：事務局1カ所、主に通信教育。

⑧H

目的：母と子の絆を強め、育児の不安を解消する。知識教育を行うのではなく、各自の能力（天分）を育てる。

方法：母親自身の心を育て、声を出し歌い、体を動かす（体操）ことで胎児とのコミュニケーションを計る（心育、音育、動育）。

施設：事務局1カ所、全国6カ所でセミナー開催、通信教育。

考案

各施設の目的をみると、妊娠中より母親自身を教育し、妊娠早期より母性の確立を図り、その結果として胎児にも良い影響を与えようとするものと、胎児そのものの学習能力を確立しようとするものとに大別される。核家族化が進み、母親の育児に対する教育が、家庭内で行えなくなったことを受けて設立された施設、幼児教育の根幹を胎児に求め設立された施設といえる。個人個人の意識とは別に生物の進化の過程をたどれば、人間がより良い子孫を願うことは当然である。そうした観点からも、胎教は古くから存在し受け継がれてきたと考えられる。しかし、これらの施設の目的は胎教そのものがもつ方向性を示しているのではなく、現代の妊婦が直面している育児、教育への不安といった社会問題を反映した結果とも考えられた。

各施設の指導方法は多岐にわたる。類似した方法を

用いていても、異なった目的を持ち、異なった方法によっても、類似した目的を達成しようとしている。いずれにしても母体を通じて各種刺激を胎児に伝え、それぞれの施設が掲げる目的に到達しようとするものである。母体が不快と思わない刺激を、妊娠中に与えることに問題はないであろう。そのような観点からみれば、いずれの施設の指導方法も産科学的立場から、否定すべきものは認めなかった。しかしながら、母体の精神面の指導を行えば、妊婦の生活環境は、各自の意思と目的によって変化するわけである。すなわち、妊婦自身が自らの意思により、胎教を取り入れるということは、生活環境そのものにも、影響を及ぼすことになるわけである。

胎教の効果を判定する場合、各施設の目的により、母性の確立、児の学習能力開発に分類し検討する必要がある。母性とはすなわち、女性が母親として自分の産んだ子供を、守り育てようとする本能的性質である。現に各産科施設、保健所などで行われている母親学級も、そうした母性を育み助ける方法の一つと認識することができる。同様に考えれば、今回調査した施設においても、その指導方法は独創的であれ、母親教育という面では目的にかなった効果をあげることが、十分可能と推察された。したがって、妊婦の生活態度や生活環境を行政として管理することが望ましいと考えるならば、今後これら施設に指導を行う必要性が生じる可能性もあろう。

一方、胎教の胎児・新生児への効果に関する報告は、各施設でそれぞれ特殊なケースについて、マスコミ、ならびに各機関紙を通じ行われている。しかし、客観的に判断できる材料は認めなかった。胎児に対する胎教の効果を判定するということは、各種刺激と胎児のadaptationを検討することにもつながる。現在、産科学は一部の刺激（振動、音、光、運動）に対する短期的な胎児反応を発見したに過ぎない。したがって、意識の確立や学習能力といった中枢神経系はもとより、身体的にも高度な成熟を要する反応に対する、科学的なアプローチは現時点において、困難と言わざるを得ない。

2 胎内記憶 (Imprint) についての基礎調査

表1

調査に用いた12曲	
①俳句	四季のうた 12編
②英語、早口言葉	Betty botter, Peter Piper Picked a Peck
③ラテン語、散文	Somnium scipionis より Capita I-IV
④英語、聖書	St. Luke Ch2 vv1-20, 25 -35, 40-52
⑤日本語、物語	象さんの長い鼻
⑥英語、物語	Winnie The Pooh より Chapter Ten
⑦ピアノ曲	Chopin作曲ETUDES 変イ 長調NO10、変ニ長調NO8
⑧ワルツ	Johann Strauss II作曲 入り江のワルツ
⑨長唄	吾妻八景
⑩英語、歌	Corner of the sky
⑪独語、歌	Johann Strauss II作曲 こうもり 第2幕より
⑫独語、歌	Les Enfants de Noel

対象ならびに方法

対象は平成4年度と同一で日本医科大学付属第一病院ならびに関連病院において妊娠管理、分娩を行った15組の母児とした。表1に示した12種類の音楽テープ(一曲約5分)のうち2種類を対象妊婦が不快に思わないことを条件に任意に選択させ、一つを妊娠30週から35週に、他を妊娠36週以降に一日3回以上反復して聞くよう指示をした。なお、これら12曲は日常生活で接する機会の少ないことを条件に選択し、聴取時間、音量などに厳密な規定は設けなかった。そして、出生後1ヵ月目と2ヵ月目ならびに6ヵ月目に全12曲をランダムに録音したテープ(60分)を一度だけ母児に聞かせ、各12曲に対する新生児の反応を母親の主観により判定した。新生児の反応は、にこにこする、喜ぶなど快の反応、泣き出す、嫌な顔をするなどの不快の反応、音に関心を持つが快・不快の判定が付かない不規則な反応、不応に分類した。

結果

①1ヵ月目の反応(平成4年度報告)

生後1ヵ月目の結果では妊娠30~35週に聞いた曲

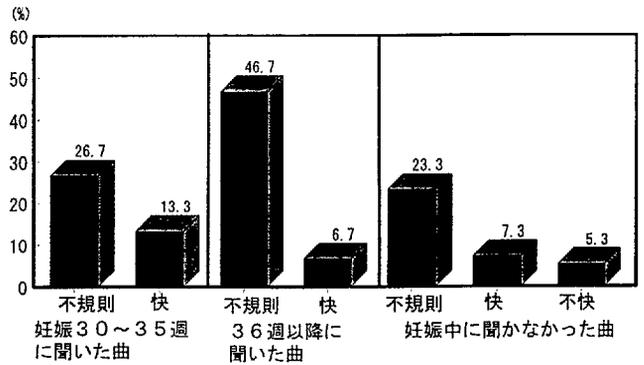


図1 生後1ヵ月目の調査

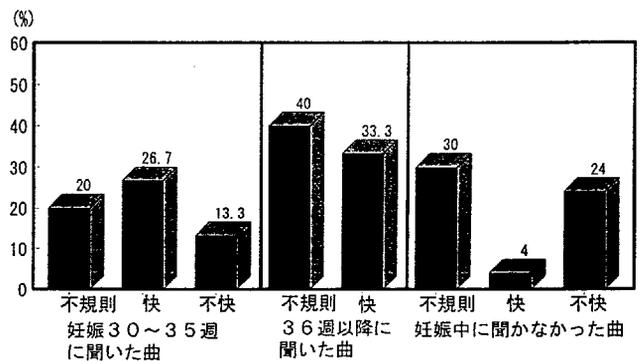


図2 生後2ヵ月目の調査

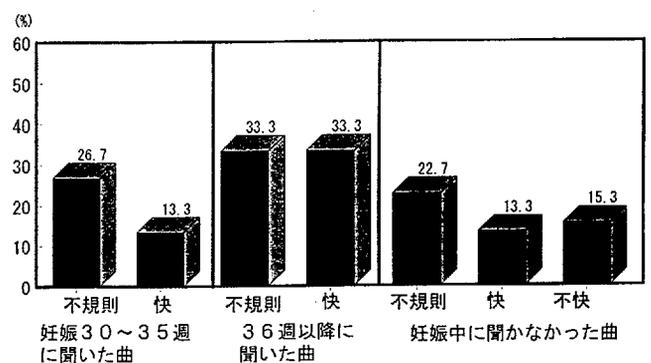


図3 生後6ヵ月目の調査

に対し40%(6/15)が反応し、36週以降に聞いた曲に対しては53.3%(8/15)で反応が見られた。一方、妊娠中に聞かなかった曲に対し反応を示したものは35.9%(54/150)であった。反応の詳細は図1に示す。

②2ヵ月目の反応(平成4年度報告)

生後2ヵ月目の成績は妊娠30~35週に聞いた曲に対し60%(9/15)が反応し、36週以降に聞いた曲に対しては73.3%(11/15)が反応を示した。一方、妊娠中に聞かなかった曲に対し反応を示したものは58%(87/150)であった。反応の詳細は図2に示す。

③6ヵ月目の反応

以上の成績に引き続き行った6ヵ月目の結果を示す。母親が主観により判定し得た児の反応は妊娠30~35週に聞いた曲に対し40%(6/15)で、その内訳は不規則26.7%(4/15)、快13.3%(2/15)であった。また、36週以降に聞いた曲に対しては66.7%(10/15)で反応が見られ、その内訳は不規則33.3%(5/15)、快33.3%(5/15)であった。一方、妊娠中に聞かなかった曲に対し反応を示したものは51.3%(77/150)で、その内訳は不規則22.7%(34/150)、快13.3%(20/150)、不快15.3%(23/150)であった(図3)。

生後1~2ヵ月では、妊娠中に聞いた曲と聞かなかった曲で、新生児の反応が異なり、聞いた曲に対し反応頻度が増加した。また、妊娠後期に聞いたものほど新生児期の反応が高率に出現する傾向を示した(平成4年度報告)。しかし、それらの傾向は生後6ヵ月に入るとやや弱まり、母親自身判定に苦慮するケースも出現した。

参考文献

- 1) 七田 眞: どんな子だって必ず伸びる, PHP 研究所. 1985.
- 2) 公文 公: お母さんが伸ばす赤ちゃんの知能, 講談社. 1993.
- 3) J, Susedik: 胎児はみんな天才だ, 祥伝社. 1986.
- 4) 谷口祐司: 赤ちゃんを守る、ママへのメッセージ. 育児文化研究所出版. 1988.
- 5) 井深 大: 0歳, 教育の最適時期. ごま書房. 1986.
- 6) 森本義晴: 胎教, エピック社. 1993.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約

胎教が、妊婦の生活環境と出産へ及ぼす影響を、平成4年度に引き続き検討した。今年度は全国規模で胎教を行っている施設の実態調査、ならびに胎内記憶(Imprint)に対する基礎的な調査を昨年度より継続して行った。

その結果、各施設において、妊婦が胎教を実践することは、その生活環境に変化をもたらすものの、各施設毎の目的に見合う胎児、新生児に対する影響は客観的に証明されるには至らなかった。また、胎内記憶の検討では生後1~2ヵ月で認められた反応が、生後日数を隔るにつれ、弱まる傾向が示された。

次年度は、胎教を行っている妊婦を対象に分娩様式、新生児予後を調査し、胎教が出産に及ぼす影響について検討する予定である。